カナリアと紫の雲へ

雲上いつき

「頭の中に雷が入っちゃったんですよ、クマさん」
キツネは、森の医者に向かって言った。「ほら、ここ。ここにびりびりとしたところがあって」
クマ医者は、どれどれとキツネの頭を抑えた。
「ふむ。みたところ、異常はないようですが」
「そんなはずはない！」キツネは怒った。
けれど、医者は冷静だった。
「レントゲンを撮ってみましょう。それから脳波の検査も。採血もしましょうか」
「それって、どれくらいお金がかかります？」とキツネ。
「なに、心配にはおよびませんよ」
クマの医者は、忙しそうに看護師のトカゲに指示を出す。「五番の部屋を開けておくれ」
キツネは、暗い部屋に取り残されたり、頭になにか丸いものをくっつけられたり、腕をぐううっと縛られて、針を刺されたりした。
しばらくして、天井から降りてきたリスが、クマに耳打ちした。
クマは、静かにうんうんと頷いた。
「どうやらキツネさん。あなたは、寿命一年といったところですよ」
「そんな！」

「お気の毒です」クマは、小さな目をさらに小さくして、哀しみを表現しようとした。
キツネは、びりびりくる頭を抱えながら、とぼとぼ病院を出た。「お大事にー」とトカゲの看護師。
キツネは、家への道をゆっくり歩いた。コマドリが、頭の上で会話をしている。「さ、次の枝へ飛んで。特別な木の実が取られちゃう！」「はやくはやく！　お昼ご飯よ」「Lunch, Lunch, Branch, Branch!」
キツネは、「ch」という音が脳にひびを入れたように思えた。分散している陽の光が目に染みる。
キツネは、あと一年後にはこの景色も見えなくなってしまうのかと、一匹嘆いた。
途中、ハリネズミに会った。とてもお喋りなハリネズミのことを、キツネはあまりよく思っていなかったが、いまはぜひとも彼と話をしたい気分だった。あの痛そうな背中の針でさえ、愛しいものに思えた。
「やあ、ハリネズミくん、聞いてくれ、聞いてくれよ！」
「ああ、キツネじゃないか！　ちょっといま、時間がなくてね、なにせ、友人の誕生日プレゼントを買いにいかなくちゃいけなくてさ！　はは。誕生日って言うのは、実は今日のことで、それに気がついたのも、実は今日なんだけどさ！」
「時間がないのは、僕の方さ！」
ハリネズミは、大笑いして先を急いだ。キツネは、必死に後を追って叫んだ。
「僕、あと一年で死ぬんだよ！」

「うんうん、そうなのか、それは大変だな！」
ハリネズミは、肩掛け鞄を背負い直した。キツネは、あまりの反応に、「きゃあ！」と悲鳴をあげた。キツネは、ハリネズミの前に立ちはだかった。
「僕、あと一年で死ぬんだよ」
彼はもう一度言った。そのとき、ようやく、ハリネズミの黒い瞳がキツネの細い目とばっちりあった。
「死ぬ？」
ハリネズミは、生きてこのかた初めて口にした言葉のように、「死ぬ？」という発音を味わった。
「そうだ、死ぬんだよ。あと一年なんだよ」
「だったら、君。なにか好きなことをしないと」ハリネズミは、キツネを頭から足先まで眺め、早口で言った。
「好きなことだって？！」
「そうさ。なにかあるだろ。僕だったら、針の手入れをするね。一本、一本、丁寧にさ。ほら、僕って、綺麗好きだから。土に埋められるのでも、燃やされるのでも、綺麗でいた方が格好がつくだろう？」
キツネは、まじまじとハリネズミの黒い目を見て、数秒後、悲鳴を上げて走り去った。
彼は、岩穴にある自分の家に駆けこむと、戸口を閉めて、ずるずると座り込んだ。尖った口先に自分の手を入れ、がたがた震えた。

「死んでしまう、死んでしまう。僕、あと一年で死んじゃうんだ。どどど、どうしよう」
それから、言葉がほとばしり出て止まらなくなった。
「車の免許、まだとっていない。ああ、カナリアと海に行きたかったのに。海と言えばスキューバダイビングもしたかったんだ。そういえば、スキューバダイビングにも免許がいるな。とるのにどれくらいかかる？　いいや、それよりも、僕、まず、カナリアに告白もしていないや。……カナリアは、僕があと一年で死ぬと言ったら、なんというかな。『好き』って言ってくれるかな？　いやいや、ちょっと待て。それって、カナリアに対してすごく失礼だ。お涙ちょうだいで『好き』って言ってほしくないよ。カナリアが、僕のこと好きじゃなかったらどうしよう。告白して、振られたら……それこそ、死ぬ前にして最高に酷い仕打ちじゃないか」
キツネの爪は、がじがじ噛み続けられたせいで、丸くなりはじめた。
「やめやめ、もっとやるべきことを考えよう。スポーツカーに乗る？　免許がないんだった。大量のお菓子を食べる？　いいや、寿命がもっと短くなりそうだ。見損ねた映画は？　たくさんあるじゃないか。それを、この一年で制覇しなくちゃ。見すぎて目玉が溶けかけるかも。そんなことより、海外旅行をまだ一度もしていないぞ。インド、中国、メキシコ、スペイン、トルコ、ギリシャ、ノルウェー、アイスランド、北極に南極、エジプトも！　困った困った。時間もお金も、全く足りない。特大の花火も見るべきだな。最高のステーキも食べないと……。ああ、そんな。僕がまだ知らないこと、知らない食べ物、

会うべきだれか、たくさんいるんじゃないか？　ああ、彼らに会えないなんて。みんなは生き永らえて会えるのに、僕だけ、あと一年しかないなんて！」

キツネは、その日中、しくしく泣いた。

だから、夕方、カラスの郵便屋さんが、「もしもし、新しいフライパンをお届けに来ましたよ。注文しましたよね？」と訪ねてきたのは、救いだった。キツネはそのとき、ポップコーンをむしゃむしゃ食べて、涙を流していたが、カラスが来た瞬間、ぱっと飛び出して、真っ赤なフライパンを受け取った。

「ありがとう、ありがとう」

キツネは、何度もお礼を言った。

カラスは、ポップコーンの塩まみれになったキツネの顔に、目をまん丸くしながら、「毎度どうも」と言って飛び立った。

「待って、待って。一度きりでも君に会えて、本当によかったよ！」

キツネは半狂乱になって叫んだが、カラスは、「おお、いまのお客はなんだかとても大げさな気がする。変わり者だぞ」と思って、羽ばたかせる速度を上げるのだった。

次の日、キツネは朝早く起きて、散歩をはじめた。そして、犬や蝶、ハト、道に咲く花と会っては、

「あと三百六十四回しか見られないのだ。もしくは、もう二度とないかも」と思って、丁寧にお辞儀をして挨拶をしたり、ひっそり心の中で涙を流したりするのだった。

けれど、お昼ごろになると、泣くのがまったくつまらなくなってしまって、今度はなにをしようかと手持ち無沙汰になった。あと三百六十四日しか過ごせないとしても、三百六十四回、毎度毎度悲しむのは、心臓が痛くすぼまって疲れてしまう。それに、たいそうもったいない気もした。

キツネは、商店街をあますところなく見てまわった。ニンジン、ジャガイモ、落花生、ピーマン、ホウレンソウ、オレンジにリンゴ、桃。どれも綺麗だったりみずぼらしかったり、まちまちだ。それでも、見納めの儀式をしているキツネとしては、すべてがなくてはならないものだった。それから彼は、商店街の先にある丘の公園へ歩いていった。

キツネは、丘のてっぺんへのぼりながら、ああ、雷が頭の中に入ったのは、この場所だったんだよなと思った。嵐の日ではなくて、いまのようにとても天気のいい日で、キツネは、ビーフジャーキーを齧りながら、空に向かって石を投げていたところだった。

二匹連れの牛がやって来て、その高く投げられた石を眺めていたっけ。それから石は、池へトポンと落ちて、牛たちは「まぁ、もー！」と歓声を上げて、キツネに笑ったのだ。キツネは、いっぱしのパフォーマーのように会釈して、またゆっくり歩きはじめた牛たちを見送った。

キツネは、いまと同じようにベンチに座り、がちょうの親子が尻を振って丘の麓を歩く様子や、アイ

スクリーム屋の前で駄々をこねる子ブタをちろっと見ていたものだった。遠くの時計塔の鐘や葉のざわめきを聞き、明日はお天気だろうと思った。

けれど、一粒の雨が鼻先にあたったとき、キツネは、「勘が外れた」と思った。そしてそれから、紫色の雲が一つ、町の方から漂ってきて、丘の上にとどまったのだった。

キツネは、おかしなその紫色の雲をじっと眺めて、あいつに石でも当ててやろうかなと思った。なんといっても、キツネの勘がはずれたのは、あの雲のせいなのだから。

そして、こぶし大の石を見つけて、雲にねらいを定めたとき、雲がぱっくり口を開けて言った。

「なあ、それで俺をいじめるつもりか？」

「いじめるつもりはないよ」キツネは言った。「ただ、ちょっと……。ここにきたのはどうしてだろうと思って」

彼が石を後ろ手に隠すと、紫の雲は、口を歪めた。

「気分が悪いんだよ」雲は不機嫌に言った。「いいことが、ここのところまったくないんだ」

「そんなことはない」キツネは、なにも考えなしに軽く言った。

「へえ？」と雲。「羨ましい限りだ」

雲は、なにか含んでいるかのように、もぐもぐと口を動かした。キツネは、じろりと睨んで、足を座面に伸ばし、ベンチに対して平行に座った。

「なにか言いたいことがあるなら、はっきり言いなよ」キツネは雲に言った。
すると雲は、ぽつぽつと雨を降らせ始めた。同時に、小さく語りはじめた。
「新しい仕事に就いたんだよ。朝早くに雨を降らせる仕事さ。みんなでいっせいに、一、二の、三でね。遅いのも、早いのも、だめなんだよ。それから、降らせる位置は、高くても低くてもだめなんだ。リーダーの雲がはっきり決めてくれるのさ。適切な時間と位置をね。それから一日中、次の目的地を探すために、あらゆるところを駆けずり回るよ。でも、雨を降らせも、君らは不満たらたらだ。『今日じゃない方がよかった。なんで昨日は降らせてくれなかったんだ。邪魔なんだよなあ』って顔で、僕を見るのさ。でも、これが僕の仕事さ。しかたがないじゃないか」
「向いていないんじゃないか？　転職したら？」キツネは、頭にかかる雨を払いながら、石を投げて取って、投げて取ってを繰り返した。
「そんなどころじゃないよ。暇がないよ。お金がないよ。切羽詰まっているんだ。これでも頑張って生きているんだ。のうのうとしている君には、わからないだろうが」
そこでキツネは立ち上がって、言ったものだった。
「はあ！　のうのうだって！　なんて勝手なやつなんだ。僕だって懸命に生きているぞ。そもそも、みんなが君を嫌がって見ているのは、君がそう思っているだけの話じゃないか？　そういうのを、自意識過剰っていうんだよ。どうしてわからないかなあ？」

とたん、雲は大泣きをして、雨と雹と雪を同時に降らせ、雷鳴をとどろかせた。キツネは、どうしたらよいかわからなくなって、ベンチをおり、後ずさりした。

「あーっと、えーっと……」

そして踵を返して離れようとしたとたん、雲から衝動的に放たれた稲妻が頭に当たって、全身がびりびりと激震した。

気がつくと、また空はすっかり晴れていた。キツネはそれから数日、なにごともなく過ごしたが、気分だけはすぐれなかった。頭の中になにか蔓延るものがあって、目玉焼きがしっかり正円にできあがっても、洗濯物が清々しく乾いても、八百屋の主人に忘れず挨拶されても、まったく喜べなかった。

そのうち、頭痛がしてきた。週末はカナリアを遊園地に誘う予定だったけれど、頭痛が心配で、ジェットコースターなど乗る気にもなれなかった。ぐるんと回った拍子に、脳みそがおっこちたらどうしよう。

そういうわけで、キツネは病院へ向かったのだが、余命一年を宣告されて、途方にくれるしかなかった。

あの日と同様にベンチに座りながら、キツネは、まさか、こんな突然に「死」がやってくるとは……と深刻になって考えるのだった。あの雲のせいだと思ったが、クマ医者が言うには、原因がないとのことだった。

「あの医者が藪医者なのかもしれない」
キツネは呟き、一瞬、猛烈な怒りがわいた。ベンチを散々蹴り飛ばして、そのあと、すっかり無気力になって、またベンチに座った。つま先が痛い。ベンチはかたく地面に張り付いていて、もう怒りさえも無駄なものに思えた。なんといっても、自分は、あと一年で死んでしまうのだから、あの医者に怒ったいまの時間が、とてももったいなく思えてきた。
キツネは、再び町中を見てまわることにした。また哀しみがやってきてしまったのだ。キツネは、ハリネズミが言ったことを思い出そうとした。好きなことをやるのだ。そのためには、まず、好きなことを探さないといけない。焦っていたし、不安だらけだった。それにどこかで、この病気をなおせるだれかがいるはずだと、まだ希望を持っていたりもした。
インドゾウが営むカレー屋でお昼を食べて、かつて通った小学校を過ぎ、しゃれたオオカミが経営する服屋を覗いた。布団が干された住宅街を歩き、ブランコを漕ぎ、中古車販売店に並ぶ小さな車を眺めて、カナリアと小旅行に行く儚い夢を描いた。
日々、キツネの足は、北へ南へ、東へ西へと伸びていった。
そんな風にして歩き回っていると、見知らぬ建物を見かける機会が多くなった。とりわけ彼の気を引いたのは、町を囲む山の斜面に建っている、白い三角形だった。山に埋もれるようにして建つその三角形の面には、渦巻き型をした窓があり、日の光をきらきらと反射していた。

キツネは、明日はあそこへ行こう、と思った。とにかくそれは、自分ができる、唯一のやりたいことになった。あそこが謎なまま死んでしまっても、きっと問題ないだろうけれど、まだやっぱり死に対する恐怖があって、どこかにそいつを置いておきたいと思っていたのだ。そう、とりあえず、あの三角形の中にでも。

美術館、博物館。もしくは、そのどちらとも言えた。清々しい白色の館内に、螺旋の陽光が落ちている。そしてまた、建物自体もぐるぐると螺旋状に下降していて、進めば進むほど、奥へ細くなっていた。

ついにあの三角の建物の中に入ったキツネは、そんな風にして眺めていたのだが、しかしながら、後悔していた。「あのう……!」声をかけても、だれも出てこないのだ。

真っ白な床、渦をまく日向、そこに椅子と机が一組となって、三つ並んでいた。両側には、真っ白になった大木の切り株が、硝子の箱の中におさまっている。全部で四つあり、木の捻じれ方、わずかに伸びた枝の長さ、節の位置と数は、それぞれ違っていた。キツネは、これらを見て、美術館か博物館かと思ったのだが、説明のプレートもないその展示は、落ち着かなかった。

キツネは、それらを通り過ぎ、螺旋を見下ろした。どこからか、声が聞こえたように思ったのだ。

すると、やはり耳をそばだててみれば、ひそひそ、ひそひそと、大なり小なり、声が聞こえるではな

いか。キツネは、階下に誰かがいると予想したが、まだ降りられないでいた。もし秘密の大企業のオフィスだったらどうしようかと思ったのだ。

そこへ、一匹の羊が、手提げ袋を持って建物の中に入って来た。キツネは、どきりとして、階下を見るふりをした。どうか、不審者だと思われませんように。ここで通報されて、警察のお世話になるなんて、死を目前とする身としては、もっぱらごめんだ。

目の端で羊を観察していると、羊は、脇の階段から下へと降りてゆくところだった。階段は、ぐるぐると建物をまわり、下へといざなう。

キツネは、羊の手に、何冊もの本が抱えられていたのを見た。

すると、そのような者は、あとから何匹も現れた。

とぐろに本の包みを載せるヘビや、たった一冊の本を大義そうに甲羅にのせるカメ、それから、お腹の袋に赤ん坊ではなく本を入れたカンガルーもやってきた。

本を持ってくるのは、ここへやってくる者たちだけではなかった。階下からあがってくる者たちも、本を持っているのだ。コウモリ、ニワトリ、ハクビシン、トラ、サイ。彼らは、思い思いのやり方で本を抱え、キツネが見ている間にぽつりぽつりとやって来ては、建物を後にするのだった。

キツネは、ある可能性を抱き、螺旋階段の手すりに触れた。図書館だ、彼は一人合点した。

手すりに触れ、ゆっくりと階段を下りてゆくと、話し声はさらに幾つも聞こえ、反響も強くなった。

具体的な内容は聞き取れないが、真剣で、興奮して、哀しそうで、笑いあり、祈りと、記録と、願いと、戒めが混ざっているように思えた。図書館にしてはずいぶん活発だぞと、キツネは尾を振った。

下への道のりは、長いものだった。なぜなら、いちいちキツネが立ち止まったからだ。声が大きく響くたびに、キツネは、速度を落とした。なんと言っているのか、聞き取ろうとしたのだ。

だが、なんの一言も拾えないまま、ついにキツネは、一番下の階に来た。とたん、キツネの尾は、ぶわっと二倍に膨らんだ。

棚という棚に、この世の様々な「もの」が、ぎゅうぎゅうになって詰まっていたのだ。植物に竜、鞄に幽霊、ティーカップに妖精、毛糸に車、煮えたシチューに錆びた剣……。意思を持つ者もたくさんいて、みんな思い思いの格好で座り、ざわざわとお喋りをしていた。あぐら、寝そべり、割坐、足を組んだり、腕を組んだり、右を向いたり、左を向いたり。上を仰いで考え事をしていたり、下を向いて下の段の者とおしゃべりしたり。その中には、見上げるほど大きなものもいれば、屈んで目を凝らさないといけないほど小さなものもいる。考古学者、医者、科学者、人類学者、天文学者、哲学者、少年、少女、王族、翻訳家、芸術家、収集家、写真家、旅人、釣り人、料理人、詩人、裁判官、警察官、諜報員、土木作業員、弁護士、介護士、保育士、航海士、教師……。

いまあげたものは、キツネの目に入ったごくわずかなものにすぎないが、キツネは、もうくらくらと眩暈を起こしていた。

飛行機やら、虫やら、花びらやらがそこかしこに飛んでいるし、蔦は棚に絡んで数多の木の実を揺らしていて、古代に使われたたくさんの種類の文字が、天井や床に書き記されていた。どこを見ても、たくさんの情報があった。まるで、全世界を凝縮したエキスを、一秒にして一気に浴びてしまったかのようだ。しかもそれが、まだここへ来て一歩目なのだ。

「これはひどい」キツネは呟いた。高揚してふらつく頭を抱えながら。「どうしてこんなところがあるって、みんな教えてくれなかったんだ？」

「そりゃ、求めた者にしか、見えないものがあるってものだよ」真ん中の段で寝転がっている、口ひげを生やした男が言った。「とにかく、暇つぶしにはもってこいだ」

「ひつまぶしと、間違えないように気を付けたまえ」反対側で、でっぷりと太った白髪の老人が、膝に拳を置いて朗々と言った。「想像できるか、ひつまぶしを。想像できるか、暇つぶしを。持って帰らなければならないものが、山ほどあるぞ」

どこか遠くで、サラマンダーが火を吹いた。天井の一角が真っ赤に染まり、そこから白い猫の手がうねうね出てきた。声が四方八方から聞こえて来て、歌や記録、写真、物語が、たくさん、実にたくさん、この階にあふれていた。

「統治者は苦労が絶えない」

「眠りたくもない。死にたくもない。空の牧場を、どこまでもさすらっていたい」

「労働者は、いつの時代も、一番に国の犠牲となります」
「私たちはおらず、森があった。私たちはいなくなり、森が残る」
「女性に投票権を！」
「この断崖はオアフ島の歴史にのこる悲劇の舞台の一つで……」
「幸福は、引き寄せるものではない。自ら作り出すものなのだ」
「学問と芸術とは、肺臓と心臓のように助け合う、どちらかいっぽうがだめになれば、また一方もだめになる」
「砂漠で私は見た。裸の獣みたいなやつを……」
「自分がいつ死ぬかがわかっていると想像してごらん」
「想像してみて欲しい。そのとき、自分はどうするだろうか、と」
「『おまえは自由になるのだ』と彼は言う。『さもなければ、おまえはもはや存在しなくなるだろう』」
キツネは、はっとして、いまの言葉が聞こえる棚へ向かった。
「もしもし、いま言ったことの意味、だれかわかりますか？」
本棚には、車いすに座る老人や、目の見えない若者、反抗期の少女や、鬼の兄弟、裕福な夫人など、様々いたが、みんなキツネを見て、優しく、くすくす笑った。
「いいや、だれ一人、わからないさ。答えも、だれも持っていない」老人が言った。

「……そんな！　じゃあ、どうしてあんなことを言ったんだ！」
「話し合っているのですわ。答えがないから。たったの一つもね。伝統、法律、料理、人生、話すことは山ほどありますわ。もちろん恋愛も、ここでは話し合うのですよ」
夫人が言い、キツネは、カナリアのことを考えた。
「……僕も、いろいろ問題があるんです」
「じゃあ、あんたも知恵を出してよ。さあさあ」少女が眠そうに手招きをする。「あたしの経験だとね……」
キツネはそれから、自分がぺったり腰を下ろして彼らの話を聞いていたことに、日が暮れるまで気がつかなかった。

一年後、キツネは、あの丘の上にまた登り、ベンチに座った。すると、遠くの町の上空に、紫色の雲が一つ浮かんでいるのを見つけた。
彼は、立ち上がって、そちらへ歩いた。後ろに伸びる影に、ざわざわと数多の物語が見え隠れしている。キツネは、その中のいくつかを選別し、丁寧にラッピングして、「カナリア」と「紫の雲」へ、一つずつ送った。

彼らはいま、私たちと同じように、亡くなったキツネの物語を読んでいる。彼らがその後、物語を本にして、あの白い三角図書館におさめたのは、また別の話。

引用元

「眠りたくもない。死にたくもない。空の牧場をどこまでもさすらっていたい」
『ティファニーで朝食を』トルーマン・カポーティ(著)　村上春樹(訳)　新潮文庫　二〇〇八年

「私たちはおらず、森があった。私たちはいなくなり、森が残る」
古代スラブの諺

「この断崖はオアフ島の歴史にのこる悲劇の舞台の一つで……」
『イザベラバードの旅の世界』金沢清則(著)　平凡社　二〇一四年

「学問と芸術とは、肺臓と心臓のように助け合う。どちらかいっぽうがだめになれば、また一方もだめになる」
トルストイ

「砂漠で私は見た。裸の獣みたいなやつを……」
『アイスクリームの皇帝』所収『黒い騎士たち その他の詩行』スティーブン・クレイソン(詩)
柴田元幸(訳)　河出書房新社　二〇一四年

「自分がいつ死ぬかがわかっていると想像してごらん」
「想像してみて欲しい。そのとき、自分はどうするだろうか、と」
『炎に恋した少女』ジェニー・バレンタイン(作)　田中亜希子(訳)　小学館　二〇一七年

「『おまえは自由になるのだ』と彼は言う。『さもなければ、おまえはもはや存在しなくなるだろう』」
『鏡の中の鏡』所収『惑星の回転のようにゆっくりと』ミヒャエル・エンデ(著)　丘沢静也(訳)
岩波書店　二〇〇一年

カナリアと紫(むらさき)の雲(くも)へ

2023 年 10 月 28 日　発行

著者　雲上(くもがみ)いつき

町制施行 60 周年・かんなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子
発行　函南町教育委員会
製本　函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。
（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の
第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。
作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるもの
とします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は
著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

「余命一年」と告げられたキツネ。途方にくれて町をただ歩きまわる日々。あるとき丘の上にある不思議な建物を見つけて入ってみると、そこは図書館で……。キツネが図書館で出会ったものとは。